

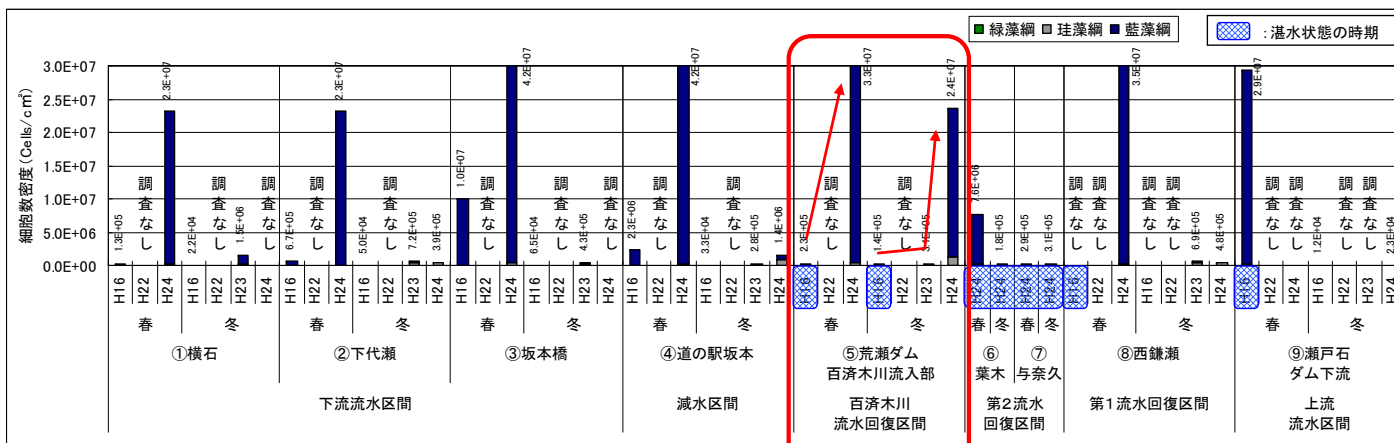
(6) 植物

1) 付着藻類

【参考資料 I-125～I-134 参照】

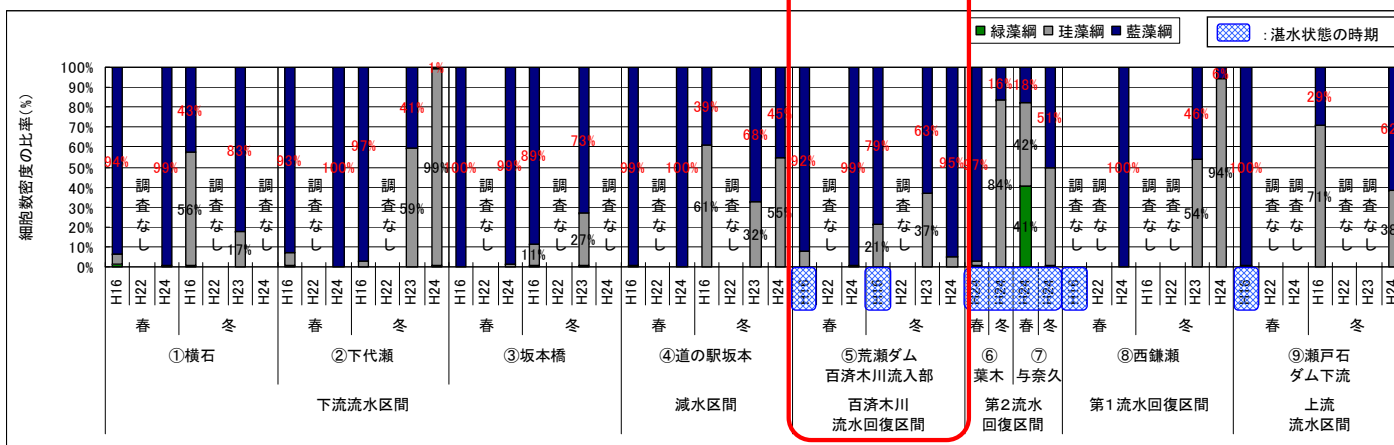
評価項目	視点	今年度の調査結果概要	評価概要
経年的な変化状況	付着藻類の細胞数密度	・「⑤荒瀬ダム百済木川流入部」のみ、春冬ともに、細胞数密度が著しく増加している。中でも藍藻類が大きく増加していた。	・ H22 年 4 月のゲート開放によって百済木川では水位が低下して流水環境に回復し、日光が河床に到達するようになり、光合成を行う付着藻類の細胞数が増加してきた。

付着藻類の細胞数密度



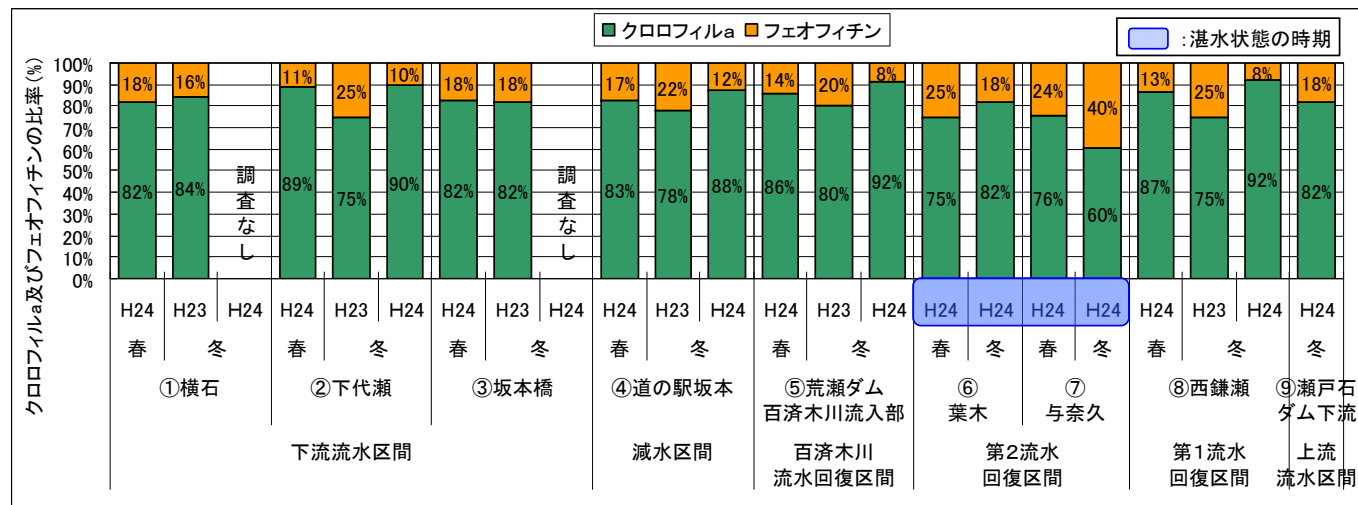
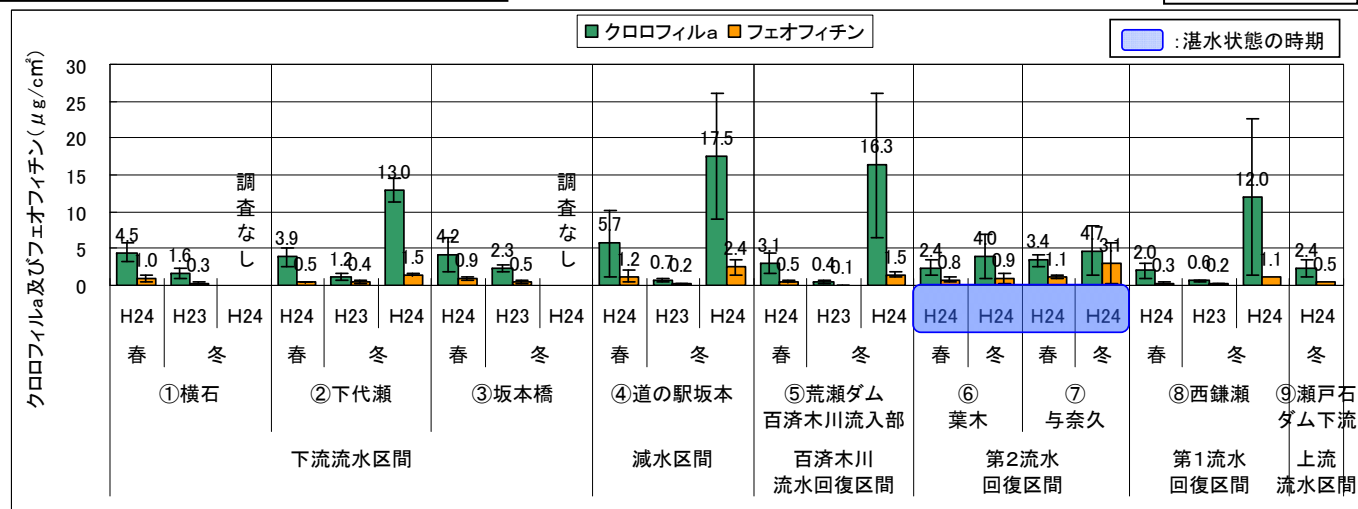
【用語の解説】

- ・ **藍藻綱**：細胞の中にははっきりとした核のない原核生物であり、群体を形成し黒っぽく見えることが多い。流速が速く、石礫上に堆積物が少なく、アユによる摂食が盛んな箇所でも優占していることが多い。代表種として、*Homoeothrix janthina* (ホモエオスリックス・ヤンチナ) が挙げられる。
- ・ **珪藻綱**：ガラスの成分である珪酸でできた殻を持ち、黄褐色に見えるのが特徴である。流速が比較的遅く、古い石の付着物が残る箇所でも多い傾向にある。代表例として、*Gomphonema* 属 (クサビケイソウ属) が挙げられる。
- ・ **緑藻綱**：細胞中に緑色の色素を多く含むことから、色鮮やかな緑色に見えるのが特徴である。この仲間の中には、大型糸状緑藻となって繁茂し、アユの餌となる藍藻や珪藻が付着する石を被ってしまうカワシオグサがある。



評価項目	視点	今年度の調査結果概要	評価概要
経年的な変化状況	付着物量 クロロフィル a 量及び フェオフィチン量	・有機物量や無機物量は、冬季で H23 と H24 を比較した場合、H24 が全体的に多い傾向が見られた。H24 の春季において、与奈久は、他地点と比較して、無機物量が多い傾向が見られた。 ・クロロフィル量は、冬季で H23 と H24 を比較した場合、H24 が全体的に多い傾向が見られた。H24 の冬季において、葉木と与奈久は、他地点と比較して、クロロフィル量がやや低い傾向が見られた。	・ダム下流地点では、無機物量が少なく、クロロフィル量は多くなっており、事業による影響は見られないが、データを蓄積し今後の動向を見て判断する。

— :標準偏差



石の付着物	水生動物の餌としての特徴	指標
有機物	アユ等の藻食魚や刈取食の底生動物等の餌の一部に含む	強熱減量
無機物	シルトや粘土等から構成され、餌とならない	強熱残留物量
生きている藻類	栄養価の高い餌の量を示す	クロロフィル a
死んだ藻類	栄養価の低い餌の量を示す	フェオフィチン
その他の有機物	主な餌とはならない	－
付着藻類	餌となる付着藻類の種別の内訳を示す	種別の細胞数密度

- 51 -